



TITLE:

経済学研究のあり方と民主主義的 共同研究体制

AUTHOR(S):

森岡, 孝二

CITATION:

森岡, 孝二. 経済学研究のあり方と民主主義的共同研究体制. 経済論叢
1969, 104(2): 101-110

ISSUE DATE:

1969-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/133353>

RIGHT:

經濟論叢

第104卷 第2号

「経済学のありかた」特集

歴史学と「民主主義」	尾崎芳治	1
都市の論理と非論理	島恭彦	17
貧乏と経済学	岸本英太郎	28
近代科学と人間	石田傳	40
経済学研究のあり方と民主主義的共同研究体制	森岡孝二	51
経営学	田杉競	61
最適計画の理論	浅沼万里	70

昭和44年8月

京都大學經濟學會

経済学研究のあり方と民主主義的共同研究体制

森 岡 孝 二

マルクス主義経済学は「労働者の経済学」である。それはその科学の性格上いわゆる「大学科学」の枠におさまることはできない。マルクス主義は弁証法的世界観の故に事物の内的連関の総合的統一的な把握を要求する。経済学を教科書的に理論と歴史と政策に分解し、個々の研究者を、資本主義の全体像を明らかにする一般理論の豊富化とは無関係に、個々の特殊研究に埋没させようとする科学研究上のセクシュナリズムや、それを助長する講座制度の偏狭さはもともとマルクス主義とは無縁である。また「イデオロギーからの科学の解放」という名目のもとに、マルクス主義を科学的な研究体制から放逐しようとし、マルクス主義にたいするきびしい思想差別を前提とするようないわゆる学閥、アカデミズムに対しても、マルクス主義の経済学徒は、きびしく対決しなければならない。また、マルクス主義の経済学徒は、科学の総合性を主張して「大学」という狭い枠をこえるだけでなく、民衆のなかにつねにひそんでいる生活苦からの解放への欲求に対してつねに敏感でなければならない。そして、かかる解放への欲求が巨大な力となって歴史を変革してきたという教訓を尊重し、この欲求を科学的真理と結合する努力をたゆみなくつづけるであろう。

科学の総合性と民衆の生活苦からの解放への欲求との結合を基礎において、マルクス主義経済学の研究者は、思想闘争の上では徹底的にブルジョア弁護論に対して適対的であり、研究・教育体制の上では、思想、信条の自由と民主主義的な討論の雰囲気をも最も徹底的に擁護する革命的民主主義者として行動するであろう。今日、いわゆる「近代経済学」が政府や独占資本の政策と結びつい

た形で、大学の講座において、またジャーナリズムや各種の文献、資料において支配的地位を占め、ブルジョア俗流経済学の思想的影響を、学界のなかだけでなく広く労働者大衆の中にもちこんでいるが、こうした傾向に対しては私たちはきびしく立向い、御用学者と産学協同の推進者たちに対しては苛借なき批判をおこなうであろう。しかし、私たちが経済学における共同研究の意義について語り、民主的研究創造体制のあり方として共同研究を提起する場合には、私たちは、近代経済学の理論を一つの思想として、その発表と討論、研究の自由を認め、彼らが差別に反対し、思想差別に反対して、行動するかぎり、ともに研究を発展させその成果に相互に学びあってゆきたいと考える。

I

一般に科学が分化し、専門化していくにともなって、それまでばらばらに取扱われてきた個々の事物や現象の相互連関と相互依存関係が明らかにされ、研究対象（自然および社会）の全体像の認識がより総合化し、体系化してくることは科学研究の発展における弁証法である。自然科学においては、このことは科学の成果が照らし出す事実そのものによってすべての人々に明瞭なように見える。しかし、この場合でも、新しい科学上の発見とそれにともなう新しい科学領域の成立は、それが経験的にはまだ未知のものであるということによって、しばしば自然の運動過程そのものが検証している唯物論と弁証法から研究者を遠ざけ、観念論的で形面上学的な方法を延命させていることは否定できない。

ところで、自然科学がこのように哲学の助けをかりずにある程度まで自然の諸現象の内的連関と全体像の認識にたどりつけるのとは異って、社会科学、とくに経済学の場合、経済的社会の諸現象についての個別的、専門的研究の発展が、その科学の一般理論の豊富化に寄与し、その総合の過程が社会の全体像の認識に結びつくには、哲学（弁証法的唯物論と史的唯物論）を必要とし、その原則から逸脱しない意識的な努力をともなってはじめて可能である。近代の経済学の発展とその過程での個々の論争の歴史は、私たちにそのことをはっきりと教

えている。

いうまでもなく、経済学の対象は社会の生産における歴史的な人間関係である。その研究は、目に見えない手に触れることのできない、したがって現象の表面を観察するだけでは科学的、全面的認識はできない対象を取り扱うという困難をもっているとともに、階級社会では、人びとの現実生活における階級的な利害関係に直接に衝突せざるを得ない。「経済学の領域では自由な科学研究は、他のすべての領域で出会うのと同じ敵に出会うだけではない。経済学の取扱う素材の固有な性質は自由な科学研究に抗して、人間の胸中の最も激しい、最も狭小な、最も悪意にみちた感情を、私利のフリアイ（復讐の女神）を戦場に呼びだす」（マルクス『資本論』第1版、序文、邦訳、大月書店版、第1巻、11ページ）のである。そこでは自然科学における真理が万人に開かれているのとは異って、生活における利害関係が人びとにたいし真理を真理として認めることを、あるいは、認めないことを強制している。この関係からして、もし私たちが「科学と真理の中立性」を売りものにしているアカデミズムのなかにあって、日々の現実生活のなかで少数のブルジョアジーとの鋭い利害対立のもとにおかれている圧倒的多数の労働者大衆のなかに、自己の理論の強力な同盟軍をつくりだすことを怠るならば、ブルジョアジーと同盟した経済学に対する私たちの批判も力の弱いおぼつかないものにならざるを得ない。

科学としての総合性と、大多数の抑圧された民衆の階級的利益との結合は、経済学研究者に「大学」の枠をはみでることを一方では要求し、他方では、その科学的総合性が広汎な民衆の中にならずや共感をよびおこさざるを得ないという事情を説明する。京都大学経済学部の歴史においても、この間の事情は証明されている。河上肇のマルクス主義研究は大学の枠をこえ、民衆と結びつくことによって彼は一時大学を追われたが、彼の「民衆の中に根をおろした科学的思想」はふたたび大学の中に根をおろし、新しい時代の波の中で、より大規模に民衆との結合を求め、より大きな圧迫を蒙りつつある。

大学における研究集団と生活苦からの解放のために理論を求める民衆との結

合は、つねに新しい問題を研究集団と民衆の双方に提起し、より創造的な科学の展開を生みだすであろう。それはおのずから個々の研究の総合化と研究者の共同化を要求し、個々の経済現象の相互連関の法則性の認識のうちに資本主義（特定の経済的社会構成）にかんする一般理論を発展させる道でもある。このような方向がマルクス主義経済学のすべての研究者において貫らぬかれるとき、彼らの個々の特殊研究、専門研究はたんなる個別研究にとどまらず、その理論的成果はすべての研究者の共有物となるものといえよう。

II

経済的社会構成の生成、発展、消滅の必然性を理解できず、その全体像や内部編成の科学的法則的認識を否定する現代のブルジョア理論は、表象の表面的記述によって主観的に構築された経済理論の世界にのみ整合性と法則性を求めようとして、無数の「発想」、「モデル」、「理想型」等々の創出に努力している。そこでは個々の専門研究、特殊研究は、それぞれの研究の客観的連関と相互依存関係の認識へと発展するものではなく、「方法という廊下」を通じて「あるもくろみ」に対する「有用性」の基準にしたがって整理されるにすぎない。この「あるもくろみ」が、科学そのものが要求する内的関連ではなく、政府の東南アジア政策や産学協同路線であるならば、大学における今日の研究、教育体制の再編の中で新設講座が何をもたらずかはあきらかである。

アメリカ的な近代主義的研究体制は、軍学協同、産学協同と結びついて、大学の管理運営と研究・教育を分離し、研究と教育を分離して、個別研究を国家目的に合致した「実用主義」的研究・教育体制へと誘導しようとする。他方、アメリカ資金、財界資金、文部省の金権と結びついた講座制のセクシュナリズムは、「無政府主義的」に自己の権力の拡張をはかり、自分の徒弟をふやし、地位の安泰をはかろうとする。このすさまじい実用主義と無政府主義にはさまれた「かわいい研究者」は、抱括的な理論研究をできるだけ避けて小事実の「実証的研究」に流され、あるいはそれに埋没する傾向を強めざるをえない。

このような危険な傾向に私たちがうちかつたためには、一人ひとりの研究のあり方をあらためるだけでは不可能であって、全体の研究体制そのものを総合的で、民主主義的なものに改革することが必要である。

レーニン[・]はマルクス[・]が『資本論』で行なった分析方法を継承して、社会科学の研究は「歴史的現象全体の客観的な関連と相互依存関係」を明らかにするものでなければならないことをつねに強調した。

「社会現象の分野では、個々の小さな事実をぬきだし、個々の例をもてあそぶという方法がもっともひろく行きわたっている。これほど根拠の薄弱な方法はない。およそ個々の例をひろい出すことは、なんの苦勞もいらないかわりに、なんの意義ももたないか、まったく否定的な意義しかもたない。というのは、万事は、個々の出来事の歴史的、具体的環境にあるからである。事実というものは、もしそれらを、それらの全体、それらの関連のなかで取りあげるならば、たんに『曲げることのできない』ものというだけでなく、また無条件に証拠となるものである。」（『統計と社会学』全集、第23巻、邦訳、大月書店版、301ページ。傍点は原著者）

経済学の分野で「個人」としての研究者がこのような全体を忘れた小事実の研究に埋没しやすいのは、一面では政府、財界の「反動的な」実用主義と、講座制のセクシィナリズムにはさまれて展望を失うためであり、他面では、「孤独のカラ」といじこもり、「主体性」をたてにとって、自己の絶対自由を主張することが、現在社会の「能力主義」のたてまえのもとでは最良の保身術だからである。「価値観の相違」を口実に民主主義的な討論と共同研究を拒むこと、ここから、研究の発展と新たな理論水準の獲得は恐ろしく個人的な意味にゆがめられ、研究の成果は個々の研究者の「孤独な通脳」の生産物とされる。そして、現実には誰もが同一の表象として想い浮べているはずの社会の経済像についての認識はきわめて混沌としたものにされ、認識論上のニヒリズムが横行し、新たな研究の出発点として依拠すべき研究の共有財産はきわめてあいまいなものにされる。このような基礎上では私たちは経済学の真の創造的發展を促進す

ることにはできない。だが、共通の基礎理論があいまいであり、漠然としていればいるほど、特定のあたえられた目的に応じて、個別研究を実用的に総合する立場や、講座制を擁護するための個人主義思想に転落した無政府主義は、より容易に力をのばすことができる。

III

いままでに述べてきたように、マルクス主義経済学は講座制やアカデミズムの枠内におさまることはできないし、またおさまってもならない。その枠にとじこもっているかぎり、私たちの経済学は創造的發展の方向ではなく、大学の講座風に、学校の教科書風に編纂されたものとならざるをえない。経済学における個々の研究者と彼がおかれている研究環境との関係について考える場合、エンゲルスが小冊子『フォイエルバッハ論』でフォイエルバッハについて与えている説明は、私たちに基本的な問題を示唆してくれていて興味あるものである。

エンゲルスはそこで、フォイエルバッハが唯物論の立場から、はじめてヘーゲル体系の批判に道を開きながら、フランス唯物論の機械的性格からまぬがれることができず、「下半身は唯物論者で、上半身は観念論者」にとどまった理由として、彼がその人生の後半期を19世紀中頃の「あわれむべきドイツ」の「小さい村での田舎くさい陰気な生活をおくらねばならなかった」（岩波文庫版、松村一人訳、41ページ）という事情をあげている。すべての大学の教職を拒否されて南ドイツの小さな村に引退し孤独な生活をおくっている哲学者にとって、当時すでに知られていた自然科学上の革命的な発見も、その科学的意義を古い唯物論の一面性にとどめをさすものとして評価することは困難であったのである。そして唯物論の自然科学的基礎の認識がこのように不十分なものであるなら、当時のドイツで観念論に完全に支配されていた社会と歴史に関する領域においては、なおさらのこと、彼は唯物論の見地に立つことはできなかった。「そしてそれもまた主としてかれの隠遁生活のせいであって、このためにかれは——他

のどんな哲学者にもまして社会的接触を好む性質であったのに——かれにおとらぬ能力をもつ人々との協力と敵対のなかにおいてではなく、自己の孤独な頭脳から思想を生みださざるを得なかったのである。」(上掲書、43ページ。傍点は引用者)

ここでエンゲルスはフォイエルバッハがはじめて鋭いヘーゲル批判を可能にしたその唯物論を徹底させ、さらにそれを社会科学の領域に適用させることができなかった理由を、彼が政治と政治に追隨的な観念論によって占められていた大学の講座から追われて、片田舎の孤独な生活にひきこもったという事情に求めている。100年以上も前のこのドイツの状況は、今日の日本においても形をかえて、民主的研究者に対する思想的政治的差別として存在している。経済学の分野でも「産学協同」の進行によっていわゆる御用学者に特殊な地位と便宜が与えられ、さまざまな部面で研究体制の歪みが生じている。このような国家や資本の圧力のもとで、個々の研究者が「片田舎での孤独な生活」よろしく研究室にとじこもり、実践活動や政治とのかかわりを意識的に避ける傾向も強まっている。そして、その正当化のために逆立させられた科学論が、すなわち自己の学説の自由な展開を守るためには研究者はいたずらに政治とかかわりをもつべきでないという考えや、学問は「自己の孤独な頭脳」から生みだされるというユートピアが多くの研究者をとらえるようになっている。この傾向は、閉鎖的なアカデミズムのタイプに属する学者を生産する一方で、「主体性」論に関する観念論的遊戯を無数に生みおとし、全体としては、講座制をかえってつよめる役割を果している。これらの潮流が科学研究における「無政府主義」を強め、「無思想な混乱を永久化すること」によって、逆に、経済学研究・教育の実用的統制を導き入れるとともに、あらゆる差別、抑圧の研究体制への滲透に対する抵抗を「個人の主体性」——本人さえしっかりしていれば産学協同などやっても大丈夫という——の問題に還元してゆくことによって、学問の自由をますます失ってゆくことは、最近とくにめだってきている。

フォイエルバッハの悲劇は、彼が大学を追われた後に彼の研究を「他の人々

との協力と敵対」の中におくことができなかつたことから生れた。今や、現代の孤独な研究者は、学問の自由や思想差別の浸透をただ座視し、その中で保身を考える技術者に転落したのである。これは喜劇というべきであろう。

IV

私たちがめざす研究体制は大学や学界の中だけにとどまるものではない。それはいわば新しい「国民のための科学」、「労働者のための経済学」の運動でもある。

この面で、私たちは不十分でも一定の経験をもっている。その一つに、1955年に書かれた島恭彦氏の「経済学における調査活動と学界活動」(『経済評論』昭和30年2月号)に示された実践の事例と主張をあげることができる。「国民のための科学」の課題を实践する立場から、地方自治体の集团的調査活動の経験にうらづけられながら、経済学の新しい民主主義的な研究体制の創造を指向しているこの論文は、今日再読しても、そのきわだった斬新さを少しも失っていない。それは私たちが今必要としているものがそこにあるからである。今日、当時よりもさらに大学における経済学の危機が、財政的にも制度的にも思想的にも進行しているもとで、「経済学の研究者が国民のなかにはいって行って経済学を普及し調査活動をし、また逆に国民大衆を経済学の研究調査に参加させるような活動」(上掲書、4ページ)を活発にすることは、経済学を、この危機とたたかいながら、真に創造的に発展させるための基本的道程である。今日若い研究者の中で広がっている労働者の学習サークル運動への積極的参加もこの点で大きな意義をもっている。

しかし、調査活動の面では、私たちは、財政学や農業経済論におけるかぎられた実践を除いては、島氏が問題を提起した当時の状態以上には前進してはいない。その後、他の社会科学の分野で、たとえば歴史学が学校教科書の科学的編算のために教師とともに大きな共同的努力と犠牲をはらってきたようには、私たちは経済学における学校教科書に責任を負わなかつたし、自然科学の分野

で、たとえば地質学が大学の学生から小学校の生徒まで、教育労働者から一般の市民までの広範な民主主義的協力体制のもとに集団調査、共同研究を今日進めてきたようには、調査活動の創造的成果も系統性ももちあわせていない。私たちはこういう進んだ経験と教訓に学んで、この部面でも大きく一歩前進しなければならない。今日の大学における研究・教育の改革運動のなかでその動きはすでに始まっている。

島氏の論文以後、自治労や日教組のような巨大な労働組合組織との民主主義的な連携の下に、大学の枠をこえて、研究者が交流を開始した。新しい共同研究が生まれ、出版活動が始まり、若手研究者が積極的にこれらの研究、普及活動に結集した。学生も、学生会、ゼミナールの全国的な連絡組織をつくり、巨大な交流をすすめてきた。院生も、国立私立の枠をこえて、自主的な学会組織をつくり、交流を開始した。「個々の大学における研究体制・条件はきわめてまちまちでありしかも研究を進めるうえで大きな障害となって」いるという認識に立って、「院生による自主的な力で新しい研究体制を生みだし発展させ」、「現状の複雑に分化した経済諸科学の専門研究を共同的に総合化していく」（1968年6月関西地区大学院生経済学会、「創立宣言」）ことを目的に組織されたこの学会には、マルクス経済学徒だけでなく、多くの近代経済学研究者も参加してきた。

ここで、私たちの共同研究の原則はますますはっきりしてきた。私なりにそれをまとめてみるとそれはつぎのようになる。

- (1) 科学の総合性と、民衆の欲求との結合をふまへ
- (2) 個々の研究者の自発性と自主的問題意識を尊重し、研究集団の間に民主主義的関係を確立し、
- (3) 大学の枠をこえて、大学間格差に反対しつつ自主的な交流をおこない
- (4) 科学性・総合性を破壊し、民衆の欲求に敵対する思想、政策とは徹底的にたたかうが、近代経済学の研究者も含めて、学問の自由、民主主義的権利を擁護するすべての研究者と連帯してゆくこと。

私たちは、今年の1月から急に「根源的」な問いを発しはじめた人々とはちがって、戦前、戦後を通じ、民衆との結合を求めたすべての人々の伝統を批判的に継承し、新たな経済学の基礎理論の創造と民主主義的な共同研究体制をめざして持続的で、地道な努力をつみ重ねるであろう。

芝田進午氏が『現代の精神的労働』で指摘しているように、今日、大学の研究者も含めて、知識人はますます急激にプロレタリア化し、没落しつつある。没落してゆく知識人が、民衆と結びつくのはきわめて自然である。没落しつつ、仲間を差別してなりあがってゆくのは不自然である。

基礎理論研究を土台にする研究の総合化と共同研究の道は前者への通路であり、個別研究への孤独な埋没と誤まれる「能力主義」は後者への通路である。

きびしい大学再編成のさなかにあって、経済学の新しい研究の波よおこれ。いまこそ、一切の腐敗、差別、抑圧、蔑視を清算する第一歩を踏みだす時だ。